

新たなる動向へ

筆者の見るところでは、万葉地理研究はこれまでの、この歌は何地の詠作だと決める事や、この歌の中のこの地名は現在の何地だ、と究明する行き方から、他の新たな道へ進まねばならぬ。例へば、一つの国（信濃なら信濃）の地名の総合的連絡を行つて、その国全体の総括が他の国の総括とどう違ふか、といふ把握をやる。或ひは、山嶽なら山嶽、河川なら河川を中心とした万葉地理の把握——さういふ方向へ、進めて行く。それによつて、地名と、万葉人との実生活の關聯をとらへてみるとか、地名と人々の世界観との關聯を探究するのである。

それが万葉植物であれば、単にこの木・草は今の何科の何の木で、葉の形はこれこれだといつた、乾いた科学報告にとどまるのみでなく、その花木と作者との生の通ひを突きとめる。その花木を、作者は文学としてどう生かしてゐるかを探索する——かういふ方向へ行くべきであらう。いや、既にさういふ行き方への数年発足してゐる人もあるのである。

年がら年ぢゆう、来る日来る日を或る事に没頭してゐると、その仕事の進行に却つて気づかぬ事がある。万葉の研究なども、十年一日のやうに細かい事柄を突つてゐるなど、外からは見えるかも知れないが、決してさうではない。何所かで今まで解けなかつたものが分り、分りして、それ等が相集つて、或ひは定説が破れたりして、教年後には相當の進歩が積み重なつてゆくものである。さういふ動きに絶えず目を見はつてゐないと落伍する。

田舎に住んで他の批判を受けにくい学者や、都会に在つても孤高を誇りすぎる研究者が、何年も前から殆ど定説となつてゐる新説を知らなくて失敗する事は、ままた世にある出来事である。一つの学界の中らゐて、衆と共に動く事は、さういふ孤独の損失から免れる最良の方法に違ひない。